来る……。もうすぐ来る。始業前のこの緊迫感。誰も言葉を発する者はいない。この時間になると、皆の心拍数はＭＡＸだ。各自それぞれ仕事を始める。資料を開く人。パソコンを立ち上げる人。

皆様々に、仕事に取り掛かってますアピールが凄い。かくいう私もだ。パソコンの電源をＯＮ。早速、画面を開く。皆の様子を横目で見ると、画面に向かって真剣だ。私は生唾を飲み込む。その時、廊下の奥から、ヒールの音がコツコツと響いてきた。

足音で分かる。もう耳にこびりついている、あの悪魔の音。朝からテンションだだ落ちだ。ドアを開けて入ってきた。この瞬間が一番嫌だ。何も言わずにドアを開けて、ヒールの音が近づいてくるのだ。まだサメの

方がマシかも知れない。そう。その人はこの営業企画部の部長、堂島由香里だ。

部長のデスクは窓際にあり、いつも私の真後ろを歩いていく。その時に少しだけ風が巻き起こり、私の髪をくすぐるのだ。それが私には何かが起こる前兆のような気がしてならない。

デスクの並びは、堂島部長の前に六つのデスクが対面するように並び、部長から全体が見えるような配置になっている。なので仕事の合間に一息つくことも出来ない状態だ。トイレに行くぐらいはOKだが。

部長がオフィスに入ってくると、皆口々に「おはようございます」と挨拶をする。それを聞いてから、部長が「おはよう」という。それがいつもの朝の光景だ。私はライジングサンというコーヒーを扱っている企業に勤める二十五歳の花沢彩だ。

会社の業務内容としては、コーヒー豆の製造販売から、お店の出店まで幅広く扱っている。「珈琲貴族」という当社の喫茶店は全国規模で展開している。

本社は東京にあり、各支社はそれぞれの都道府県に設置されているのだ。もちろん異動などもあり、同じ社内の中にも、いくつもの部署があるのだ。その中で私は営業企画部に在籍している。

そして、この営業企画部には部長以下、六人の社員がいる。男子二人、女子四人。

ここにいる六人が六人とも、部長の厳しさにはタジタジだった。委縮してしまって、部長には何も言えない。他の部署はそれなりに活気があり、明るい雰囲気なのだが、この部署だけだ。毎日がお通夜みたいなのは。

私は、そんな毎日が耐えられなかった。ずっと辞めたいと思っている。他の部署に異動でもいい。とにかくこの営業企画部から逃げ出したい。と、いうより堂島から逃げたい。

皆の願いは、この部長がどこかに異動にならないかな、ということだった。そのことは仕事帰りの飲み会で確認し合っている。飲み会では部長に対する不平不満のオンパレードだ。

「荒川さん」

デスクに座って十分ほど経ったとき部長が呼んだ。荒川千夏。二十四歳。私の向かい側に座っている女子で、私よりも一コ下の後輩だ。私の後輩はこの荒川さんしかいない。

荒川さんは「はい」と返事をして、部長の下に早歩きで近づく。

私は、いや、皆もそうだが、部長に名前を呼ばれると、ドキっとする。

九十％以上の確率で怒られるからだ。マジで心臓に悪い。心臓麻痺で死んだら、絶対に訴えてと母にも言ってある。

荒川さんが呼ばれて皆が思うのは、可愛そうに……。ということと、自分じゃなくてよかった……ということだ。私もそうだ。とりあえずホッとしている。荒川さんには悪いが。

「あなた、やる気あるの？　ここへ何しに来てるの？　お昼ごはん食べに来てるの？」

堂島部長は腕を組んで、椅子の背もたれにふんぞり返ってそう言った。顔は笑っているが心は鬼だ。うわぁ、いきなりキタ。きつい言葉。

「は、はい。すいません……」

「何なの、この企画書。読む以前の問題だわ。誤字脱字が多すぎだし、構成はメチャクチャだし。わざわざ時間を割いて目を通して損したわ」

「すいません」
頭を下げて、詫びる荒川さん。
「ねえ、もう一回、小学校からやり直したら？　この会社はね、あなたみたいな無能な社員に払う給料はないの。一人前にお金を貰ってるんだったら、ちゃんとプロの仕事をしてくれる？」
「すいません、すいませんでした」
荒川さん、すでに泣きそうだ。私も助けてあげたいけど、どうにもできない。一コしか先輩じゃないけど、守ってやれない自分が情けない。
「すぐにやり直します」
「当たり前よ」
その企画書を荒川さんが受け取ろうとしたとき、堂島部長はその書類を真っ二つに破いたのだった。ビリビリビリ、無情な音が聞こえてきた。

そしてそれを丸めて、ごみ箱に、ポトン！

「紙がもったいないわ」と一言。

うわー、ヒドい。これが堂島由香里部長だ。怒る時はハンパない。人が二度と立ち直れないようなことを平気で言う。

「あなた才能ないわ」「あなた向いてないんじゃない」「給料ドロボーをいつまで続けるつもり？」「全く使えないわ、ホンっとウザい」などなど、数え上げれば切りがない。

当然、辞めていく人も多い。他の部署に異動願いを出している人も多い。私も先日、制作部への異動を出願したばかりだ。とにかくここにはいたくない。この鬼部長に潰される。好きで入った会社だけど、こんな部長の下では働きたくない。

笑顔など一切見せない。見たことがない。いつもしかめっ面だ。何が楽

しくて会社に来ているのだろう。何が不満なのだろう。っていうくらい。いつも怒った顔をしている。怒った顔というより、怒る、笑う、で見たとき、どちらかというと、怒る側にベクトルが寄っている。

いい言い方をすれば、クールビューティーだ。顔は決して悪くない。もっと表情を良くして、笑顔を絶やさなければ、それなりに美人だし、もっと好かれるだろうに、と思う。

皆はよく言う。顔に性格が出ている、と。私もそう思う。

その日の仕事帰り、皆で打ち合わせて、荒川さんを元気づけるために飲み会を開いた。言い出しっぺはこの部署のリーダー格の上田充さんだった。とても優しくて、いろんなアドバイスをくれる。仕事も出来るし、部長もこの人には一目置いているようで、怒られる回数は一番少ない。

上田さんのキャリアは十年だ。すでに既婚者で奥さんと子供が一人いる三十二歳だ。しかし、目の前に座っている夏目さやかさんが、上田さんを狙っている節がある。夏目さんは二十八歳で、結構男好きな風貌の人だ。もしかしてこの二人は不倫しているのではないか、という人もいる。

まあ、その話はさておいて、飲み会は始まり、皆口々に、部長への不平不満が始まった。

「荒川さん、あんまり気にしない方がいいよ」

上田さんが話しかける。すでに荒川さんは涙目だ。

「そうよ。今日の部長見てて、ホントに腹が立ったわ。あの言い方はないわよ」

と夏目さん。

「人が仕上げた企画書を、いくら何でも本人の前でビリビリに破くなんて、あり得ないわよ」

そう言ったのは、入社五年目の小坂真紀さんだ。夏目さんと同期の人だ。

「あー、早く異動してぇ。もううんざりだ」

坂上君はビールを一口飲んで、そう言った。坂上正太郎。この人は私と同期で同い年だ。部署の中のお調子者で、いつも皆を笑わせている。私も気が合うのか、いつも坂上君と呼んでいる。

「この中で、他の部署に異動願い出している人、手あげて」

上田リーダーが言った。すると荒川さん以外全員が挙手だ。荒川さんは新人なので、そこまでのことはしていない。またそのあたりの会社内のシステム的なこともよくわかっていないのだ。

「ほんと毎日が苦痛だよ。あの部長に呼ばれるとドキッとするし、坂上君、そんな仕事にいつまでかかってるの？　時間をかけたわりには、最低の出来ね。ウッセーつんだよ」

　坂上君は堂島部長のものまねをして言った。それを聞いて皆が大爆笑した。「似てるぅ」と拍手喝采だ。

「あんな性格だから、結婚できねぇんだよ。あのババァ。世界中に女がアイツだけになっても、あの女にだけは手ぇ出さねえよ」

「そこまで言うか」

「言っちゃいますよ」

　上田さんと坂上君の掛け合いは抜群におもしろい。そして私は発言した。

「みなさん部長が笑ったのって、見たことありますか？」

「ないない。笑顔を忘れた道化師だよ。笑ってもキモイよアイツは」
と坂上君。部長を捕まえてアイツときた。
「私、一回だけある。梶川専務と話してるとき見たわ」
夏目さんがそう言った。
「でも、それは社交辞令的なもんだろ。愛想笑いだよ。上役だからね」
上田さんはそう言って、から揚げを頬張った。飲み会の時はいつもこんな感じだ。堂島部長の不平不満で花が咲く。飲み会は週一ぐらいの割合で行われていた。いつも上田さんが号令をかけるのだ。そして、それから一週間後のことだった。私は部長に仕事を言いつけられたのだ。
「ねえ、ちょっと仕事を手伝って欲しいんだけど、手の空いてる人いる？」
午前中に堂島部長が言った。誰も答えない。そこで一人一人に聞いていく。

「夏目さんはどう？」
「私は今日中に仕上げないといけない仕事があるので」
と体よく断る。
「坂上君は？」
「僕も、ちょっと手が離せなくて……」
坂上君が部長の頼みなんか聞くわけがない。
「えっと、じゃあ花沢さんは？」
え？　私？　こっちへ来るか？　荒川さんじゃなくて？
「え、あ、はい。大丈夫です」
あー、断れない。イマイチ鬼に慣れないヘタレな自分がいた。他の皆は無表情で仕事に没頭しているが、内心はホッとしているはずだ。私だって急ぎの仕事があるのに……。どうしよう、明日までにしあげないとい

けないのに。
「じゃあ、午後イチで資料倉庫の前で待っててくれる？」
「はい、わかりました」
もーサイアクだ。
部長と二人で仕事なんて。怒られながら仕事するのが目に見えている。今日のラッキーカラーはブルーだってテレビで言うから、ブルーの下着付けてきたのに！　ぜんぜんウソじゃん！
お昼ごはんも喉に通らなかった。皆口々に「がんばってね」と笑いながら言う。チクショー！　人のことだと思って。午後一時に資料倉庫の前で緊張しながら待っていると、すぐに部長が来た。
「お疲れさまです」
私が挨拶をしても無視だ。無言でドアを開けて中に入る。私もあと

に続いた。

「この中から資料を探したいんだけど……」

倉庫にはスチール棚に段ボール箱がぎっしり乗せられて並んでいた。それぞれの箱には何時から何時までと期間が書かれている。それが教室ぐらいの倉庫いっぱいに置かれていた。

ええ！　この中から？　マジで？　段ボール箱いくつあるの？　一番上の箱なんかどうやって下ろすの？　なんて思っていると、

「脚立そこにあるから」

と部長が一言言った。いや、そういう問題じゃないし。重いし。でも、文句は言えない。とりあえず、どんな資料なのか、そのタイトルを聞いて、片っ端から目的の資料を探した。今日の夕方からの部長会議で使うらしい。

どの箱に入っているのか分からず、私たちはいちいち箱を開けて、中の書類を探しまくった。古い箱には埃が積もっており、ケホケホ咳き込んでしまう。そしてどの箱も重い。明日は間違いなく筋肉痛だ。でも、怒られるような仕事じゃなくてよかった。それだけでも不幸中の幸いだ。

資料は約二時間後に私が見つけた。

「部長、これですか？」

「あ、そうそう。これだ」

よかった。これで解放される。もう三時の休憩の時間だ。

「ありがとう、助かったわ」

え？　今、なんて？　なんと、堂島部長が私にお礼を言った……。ウソ……部下には批判しかしたことがない人が？　確かに言ったよね。「ありがとう」って……いえいえ、もったいのうございます。って時代劇か。

初めて言われた。私たちには感謝の「か」の字もない人が。部長はこれから部長会議で使う資料作りをすると言って、そそくさと資料倉庫を出て行った。私は一人取り残された。

なんだか、気持ちが晴れ晴れとしてきた。ブルーの下着を付けてきた甲斐があったわ。